

2026 SUPER GT Rond 5, SUZUKA GT 300km RACE

「予想外に厳しい展開となった決勝レース、多くのハプニングを乗り越え、18 位完走でチェッカーを受ける！」



●8 月23日(決勝)

スーパーGT 第5戦『SUZUKAGT 300 KM RACE』は、灼熱の鈴鹿サーキットで開催され、チェッカーまで残り 5 周という段階で大きなアクシデントが発生し、セーフティカーに先導されてフィニッシュという波乱の展開となりました。

正午から実施された20分間のウォームアップ走行で、VELOREX の 6 号車は大きなトラブルも無く、順調に周回を重ねました。タイムアタックのタイミングはありませんでしたが、各セクタータイムは満足できる状況で、最終的に20番手となる 2 分00秒804をマークし、決





勝に向けて最後の調整を終えました。

午後1時30分、気温34℃、路面温度49℃、湿度62%という蒸し暑いコンディションの中、三重県警交通機動隊のパトカーを先導者としたパレードラップを含めた2周のウォームアップランの後、52周、300kmのレースが幕を開けました。

6号車 UNI-ROBO BLUEGRASS FERRARI は、片山義章選手がスタートドライバーを務め、20番手グリッドからスタートを切りました。今回のレースでは、フェラーリ 296GT 3・EVOにサクセスウェイト 28kg を搭載しての戦いですが、スタートポジションが悪かったこともあり、遅いマシンに囲まれながらもひとつポジションを上げ、19番手で1周目のコントロールラインを通過し、さらに上位を目指します。

しかしレース序盤の混戦の中で、周囲のマシンに挟まれるような形で2度の接触事故に見舞われてしまいます。最初の接触はダンロップコーナーで3台がスリーワイドとなり、片山義章選手はイン側にいたのですが、一番アウトにいたマシンが真ん中のマシンに寄せてきたせいか、逃げ場が無い形で接触され、押し出されます。さらに130R、シケインと今度は別のマシンと激しい攻防でポジションを入れ替えながらのバトルが続き、第1コーナーで相手をオーバーテイクしたところ、イン側のそのマシンがミスをして接触。片山義章選手が駆る6号車はイン側から押し出されるような形でコースアウトを喫し、ポジションを大きく落としてしまいました。最初の接触はレーシングアクシデントと判定されましたが、2度目の接触は相手側にドライブスルーペナルティが課される結果となりました。

そのアクシデントで一時は27番手までポジションを落としてしまった片山義章選手ですが、気持ちを切り替えて追い上げ、4周目に1台、そしてまた1台と、11周目には25番手までポジションを上げ、13周目に24番手、そしてライバルたちのトラブルもあり、GT500クラスが17周目に突入し、GT300クラスが14周目に入ったところでフルコースイエロー(FCY)が出されます。ピットロードはクローズされ、この時点で片山義章選手は22番手までポジションを戻していました。

片山義章選手はピットへの無線で「接触したせいか、マシンの右リヤがおかしい」と伝えていましたが、ハンドリングに異変があったものの、タイヤには問題は無く、ドライビングでアジャストしながら走り続けました。ただしそのトラブルによって、スプーン出口や130Rといった高速コーナーで本来のポテンシャルが発揮できない状況となり、前のマシンを抜ききれない展開が続く厳しい戦いとなっていました。

前のマシンに引っかかってなかなか自分たちのペースで走れなかった VELOREX は、レースが再開し、16周目にミニマム周回で片山義章選手をピットインさせ、マシンをアジャスト





「今日は本当に厳しいレースでした。スタート位置が悪かったのが原因ではありますが、序盤の混戦で行き場が無く、2度も同じような場所を当てられてしまい、パーツが壊れて右リヤサスペンションのジオメトリーが狂ったこともあって、空力面やハンドリングに影響が出てダンロップコーナーやスプーン出口、そして130Rで本来の我々のマシンが持つポテンシャルを発揮しきれない悔しいレースになってしまいました。タイヤ交換時にもミスが出てしまい、ニクラス・クルッテン選手が頑張ってくれましたが、最終的に18位と悔しい結果に終わりました。課題が残るレースだったと思います。

ただ、俯瞰してみれば週末を通じてマシンのバランスは良かったですし、フェラーリ 296GT3・EVOのポジティブな面もいろいろ発見できました。次の菅生はマシンにとっても自分にとっても得意なサーキットのひとつですし、サクセスウェイトも軽くなります。チームもこの悔しさを忘れず、しっかりと準備して、次こそ絶対に優勝を狙います。応援ありがとうございました」



「今日は想像していた以上に厳しいレースになりました。片山義章選手がスタート早々に接触事故で2度も巻き込まれてしまい、マシンにダメージを受けて大きくポジションを落としてしまいました。それでもチームは誰も諦めることなく攻めのレースを続け、自分も頑張って1台でも多くパスしようと限界ギリギリの走りをしました。幸いピット作業でアジャストしてくれたせいか、自分のスティントではマシンのバランスも良く、自信を持って攻められました。ただ鈴鹿サーキットはオーバーテイクが難しいサーキットであり、自分が期待していたほどのポジションアップはできずに18位チェッカーとなりましたが、チームは本当に良い仕事をしてくれたと思います。次の菅生での戦いを楽しみに、僕はドイツへの帰路を目指します。また皆さんと菅生でお会いしましょう。次のレースが楽しみで仕方ありません！」





「全体的に、今回の鈴鹿大会はミスが多い週末でした。結果論ではありますが、やはり予選のポジションが悪いと、周囲の集団にいろいろな意味で巻き込まれてしまい、今回のようなアクシデントに遭遇してしまいます。ピット作業にもミスがあり、ドライバーには申し訳ない気持ちもあります。本来のマシンのポテンシャルを考えれば、この順位でレースを終えるのはとても悔しいですし、納得できるレース結果ではありません。次の菅生までの短い期間ではありますが、データをしっかり解析して、より速いフェラーリ296GT3・EVOを仕上げ、ピット作業もミスなくこなせるようにメカニックたちも全員でトレーニングをやり直し、新たな気持ちで次戦に臨みたいと思います。とにかくひとつでもミス無くすこと。勝つためには、ドライバーも含め、チーム全員がいかにミスなく自分たちの力のすべてを出し切れるかにかかっています。次のレースに向けて気持ちを引き締めて頑張りますので、今後も応援よろしくお願いします」

